

1 5 2 センチ 6 2 キロの恋人 2

目次

152センチ62キロの恋人2 ……5

立花逸人の幸せな一週間 …………… 255

1 5 2 センチ 6 2 キロの恋人 2

青天の霹靂せいてんへきれきつて言葉があるでしょう？ つい最近、私にこの言葉がびったりな出来事があった。

それは、自分には恋人なんて一生できないと思っていた私が、社内で女性人気ナンバー1の立花逸人はなはなさんとお付き合いを始めたこと。

私、森下美奈もりしたみな二十四歳は、身長一五二センチ体重六十二キロというチビデブだ。これまで痩せようとダイエットをしては、小さな成功と大きな失敗を繰り返してきた。

そして、これといって特徴のない平々凡々の顔と、細くて柔らかい猫っ毛な髪。

もし誰かに自分のチャームポイントは？ と聞かれたら、笑って誤魔化すしかないほど自慢できるものがない。

そんな私の初めての彼氏——立花逸人さんは、背が高くてスーツの似合う細マッチョさんで、日本人とイギリス人のハーフ。そのせいか彫りが深くて、芸能人にも負けないイケメンさんだ。

どうして自分がとか、私なんか彼の恋人でいいのかとか——そういうふう悩んだこともあるけど、いつだって全力で愛情を伝えてくれる逸人さんのおかげで、私は少しずつ彼の恋人として距離を縮めていくことができた。

濃厚すぎるエッチ以外、不満なんて一つもないイケメンエリートな彼と付き合い始めて、あっという間に二ヶ月が過ぎた。

私たちは今、順調に未来へと歩き出している。

第一話 変態は恋人の寝込みを襲う

目が覚めると、鳴る前に止めてしまった目覚まし時計の針を確認。

そして私は、興奮してあまり眠れなかった……と呟きつつ、小さく欠伸あくびをこぼした。遠足を楽しみにしている小学生か、と自分に呆れたけど、それもしょうがない。

だって、今日はゴールデンウィーク初日の土曜日。待ちに待った、逸人さんとの温泉旅行の出発日なのだ。

最初は、二泊三日の予定で少し遠出しようかと話していた。北は北海道から南は沖縄まで、各地の観光ガイドブックを見ながら、有名どころを候補に考えに考えて、温泉がいいねと二人の意見が一致したのだけ……

連休に入る直前に探してしまったから、いいなあと思うホテルは連泊できるところがなくて、最終的には一泊二日で隣の県にある温泉へ行くことに決めた。

新幹線で移動しようと思つて色々調べて伝えた私に、逸人さんは車で行くからと返してきた。

車の運転が苦手——というより嫌いな私は、できれば知らない道を運転したくない。かといってずっと逸人さんに運転してもらうのは気が引ける。

だからこそその新幹線推しだったのだけど、逸人さんには車で二、三時間の距離なんだから、自分

の車で動いたほうが楽だよと言われてしまった。

でも……と私がためらっていると、逸人さんはさらに、ドライブがてら色々回りながらのんびり行こうと提案してきた。

そう言われると、なるほど、それも素敵だなと思う。

結局私は、車で行くことに同意したのだった。

そして楽しみに待っていた当日の朝。

逸人さんが迎えに来てくれる時間まで、あと三時間ほどだ。今のうちに荷物の最終チェックをしなくては、と私は鼻歌を歌いながらカーテンを開けた。

+

「……美奈、俺たちは一泊の予定じゃなかったか？」

「え？ うん、そうだよ」

「一泊で……この鞆？」

約束の時間どおりに我が家のインターフォンを押した逸人さんは、出迎えた私に「おはよう」と声をかけ素敵な笑顔を向けてくれたあと、私が手にしている鞆を見て首を傾げた。

（そんなに驚く大きさじゃないと思うんだけど……）

たしかに、色々詰めているうちに鞆がパンパンになっちゃったから、一回り大きな鞆に詰め替え

たけど……

私たちが玄関でお互いの反応に首を傾げていると、私の後ろからやってきた母が「何をしているんだ？」と呆れたような声をかけてきた。

「あ、おはようございます。いえ、美奈の鞆がずいぶん大きいと驚いてしまつて」

「おはよう、逸人。美奈はな、そういうところが父親である優朔ゆうさくさんにそっくりなんだ。もしかしたら必要かもしれないなどと言つて、やたらと荷物を増やす。一泊や二泊出かけるだけなんだ。下着だけ持つていけば事足りるだろうに」

「母はいつも身軽すぎるんだよ」

（確かに一泊なのに下着や服を二泊分詰めたけど、何かあつてからあたふたするよりいいじゃない）私がそんな気持ちでぶーたれていると、逸人さんが笑つて私の鞆を手に取り、母に軽く頭を下げた。「それでは美奈さんをお預かりします。明日の夜には送つてきますから」

「別にそのまま引き取つてくれてもかまわんが」

「あのねえ、母」

「まあ、それはいいとして。それなら逸人、明日はうちで夕飯を食べて帰るといい。いや、優朔さんのためにうちに泊まつてやつてくれ。明後日も休みだろう？」

「いいんですか？」

母の突然の誘いに、逸人さんが驚いたように聞き返す。母は逸人さんの反応を不思議そうに見ながら頷いた。

「そんなに驚くようなことか？ 優朔さんは、またお前と酒を酌しやくみ交わすことをとても楽しみにしている。お土産みやげに美味しい酒でも買つてきてやつてくれ」

「あのね母、お土産を要求するようなことを言わないでよ」

「いいじゃないか、おかげで悩まずにすむだろう？」

「お土産は悩むのも楽しみなんです！」

「まったく……面倒くさい娘だ」

「ちよつと……」

「ふっ、ふふ……」

やれやれと、私に向かつてこれでもかというほど大きな溜息をついた母へ、私が文句を言おうとした瞬間、逸人さんが口元に拳を当てて笑い出した。

「逸人さん？」

「ああ、ごめん。いいじゃないか美奈。俺は人に何かを選ぶのは苦手だから、お母さんにこれと言つてもらえると助かるよ」

「おお、逸人とはとても気が合うな」

「もうっ、逸人さん、母に気を使うことないのに。じゃあ私たち行くから」

「いつてらっしやい。楽しんでこい」

「いつてきまーす」

母に手を振り、玄関を出る。

そのまま逸人さんの車に乗って、私たちの初めての旅行はスタートしたのだった。

十

途中のサービスエリアで休憩をしつつ目的地に向かう。到着したのは、二人で旅行雑誌の中から選んだホテルだ。海に見える大きな露天風呂や、海の幸山さきの幸盛り沢山のご飯がとっても美味しうだったのだ。

「想像していたより大きなホテルだな」

「そうだね、それにとっても綺麗」

フロントでチェックインの手続きをすると、受付のお姉さんが私に、浴衣ゆかたを着ますかと尋ねてきた。なんでも希望した女性客には、カラフルな浴衣を貸してくれるらしい。

着たいですと答えると、お姉さんから小さなチケットを渡された。そして売店の横に浴衣が置いてあると教えてくれたので、逸人さんと二人で向かう。

向かったそこには、たくさんたの浴衣が机いっぱいに並べられていた。数人の女性が同じように浴衣を選んでる。

「わあ……こんなに種類があると迷っちゃうな」

花や蝶の柄が入っている可愛い浴衣がたくさんある。嬉しくなって、思わず声を上げてしまった。どれがいいかなあと手に取って見ていると、逸人さんが私に向かって二着の浴衣を差し出してき

た。

「美奈、これとかこれ、どうだ？」

「これ？」

「俺は美奈にはこういう薄いピンクや黄色が似合うと思うんだ。……うん、可愛い」

私の胸元に浴衣を当てた逸人さんが、ニコニコしながらそんなことを言ってくる。

いや、あの、可愛いと言ってくれるのは嬉しい。嬉しいけど、言われ慣れていないせいとか、嬉しさより恥ずかしさが大きいです……

近くで浴衣を選んでいた女性の三人組が、そんな逸人さんを見て頬を赤く染めた。

「いーなー。私も彼氏と来ればよかった」

「そんなん私だってそうだよ」

「つつーか、あんたら、まずは彼氏を作ってからそういうこと言いなよ」

そんなことを言いながら笑っている彼女たち。恥ずかしくてそっちを向けない……

「美奈？ どうした？ 耳が真っ赤だけど」

「な、なんでもないっ。じゃあ私、この桜色の浴衣にする」

「そうか。じゃあ部屋に荷物を置きに行こう」

「うん」

フロントに戻ると、ホテルのお姉さんが部屋まで案内をしてくれた。どうやら私たちが泊まるのは、今いる建物じゃなくて別館らしい。

お姉さんの後ろを歩きながら、このあたりのおすすめスポットについて聞く。話をしているうちに私たちの泊まる部屋についた。

どんな部屋かなあとドキドキしてドアを開けると、まず見えたのは窓の向こうにある庭。(えっ、庭!? いや、一階なんだし、庭が見えてもおかしくない……かもしれないけど、なんていうかこれは、テレビでしか見たことないようなお庭なんですけど!?)

大きなベッドが二つ置かれているその部屋の奥には、なんと六畳ほどの和室もあった。

予想していたよりも随分とレベルの高い部屋に驚き、私はポカんと口を開けて部屋の中を見渡し、しまった。

案内をしてくれたお姉さんは、奥の障子の向こうには露天風呂がありますよと言って部屋を出ていく。

逸人さんと二人きりになると、私は彼の腕を掴んで部屋が違っていると訴えた。

「ね、ねえ逸人さん。私たちが雑誌で見た部屋って、ここじゃないよね? ネットで予約した時は普通のツインの部屋だったよね? ろ、露天風呂付きの部屋じゃなかったよね!?”

あまりに豪華な部屋に私が真っ青になっていると、逸人さんは掴まれている腕で、私を宥めるように頭をポンポンと撫でてきた。

「ああ、あのあと露天風呂付きの部屋があるって気付いたから、電話して変更してもらったんだ。部屋付きの風呂なら二人で入れるだろう?”

「か、変えたって、だって、この部屋、絶対高い……私、やっぱり自分の分払うからっ”

私がこんなに青くなってしまったのには、理由がある。

今回の旅行は、逸人さんから私への誕生日プレゼントということになっている。そのため旅費は全部逸人さんが持つと言われているのだ。

誕生日プレゼントにしてはいくらなんでも金額が高すぎるし、そんなの悪いらから、せめてホテル代くらいは自分で払うと話したんだけど、逸人さんは頷いてくれなかった。

正直気が引けてしまうけど、せっかく逸人さんがそう言ってくれているのにあまりしつこく言うのも失礼かもしれない——そう思って素直に甘えることにしたのだ。でも、それはこの部屋を見る前の話で。

「その話は終わっただろう? この旅行は俺からの誕生日プレゼント。美奈が金を払ったらおかしいだろう」

「でも」

素直に頷けない私に、逸人さんが溜息をつく。

「……美奈、俺は美奈と二人で温泉に入りたかった。で、この部屋ならそれができる。だから変更しただけだ。それに、正直そんなに心配するほどの値段じゃないよ。自慢じゃないが、俺はそこそこ稼いでいるからね」

「それはわかるけど……」

「美奈、せっかくのプレゼントでそんな顔をされるほうが、俺にとってはつらいよ」

「あっ、ご、ごめんささい」

苦笑して言われた言葉で、はっとした。きつと逸人さんは私を喜ばせたくてこの部屋を用意してくれたんだ。それなのに私ったらお金のことばかり心配して……かえって逸人さんに失礼だったかもしれない。

そう思つて謝つた私の頬を逸人さんは両手で包み、ちゅつと軽いキスをくれたあと、「ごめんじゃないだろう？」と微笑んだ。

「うん。ありがとう逸人さん。こんな素敵な部屋に泊まったことないから、とつても嬉しい」
そう伝えた私に、逸人さんはよくできましたと言つて、もう一度キスをしてくれた。

部屋に荷物を置いた私たちは、早速お土産を選ぼうと温泉街をブラブラすることにした。私たちが泊まっているホテルの他にも、たくさんホテルや旅館があるためか、通りはすごい人の多さだった。やつぱり大型連休はどこも人でいっぱいみたい。

「すごい人だね」

「ああ、まあ覚悟はしていたけどな」

「連休直前だったけど、ホテルの予約が取れてラッキーだったね」

「確かにそうだな。さて、美奈は誰にお土産を買うんだ？」

「んー、職場と、家族と、のんちゃんとちーちゃん。あとは由理さん、かな？ あつ、あと大狼さんにも何か買ったほうがいいよね」

中学時代からの親友であるのんちゃんとちーちゃん。二人にはお菓子と、何か小物みたいなもの

があれば買つていきたい。

（由理さんはこしあんが好きだから、お饅頭は絶対買つて……あ、川崎主任と食べるかもしれないから、おつまみになりそうな珍味もいいかも）

本木由理さんは私の職場の先輩で、入社以来ずっとお世話になつている大好きな人。由理さんと川崎主任はお付き合いをしているから、お土産も二人で食べられそうなものを探そう。

ちなみに由理さんと企画一課の川崎主任、そして逸人さんの三人は同期で、とても仲がいい。

店先に並んでいるお菓子をチェックしていると、逸人さんが不機嫌そうな声を出した。

「あいつに土産なんて必要ない」

逸人さんが言うあいつとは、大狼さんのことだ。

逸人さんと由理さんの幼馴染である彼は、なんていえばいいのか……すこーしだけマイペースで、逸人さんをよく怒らせている。そして、女性が大好きで、容姿も整っているから、ものすごくモテる。そのせいか、私が大狼さんのことを話に出すと、逸人さんはいつも必要のない心配をして不機嫌になってしまうのだ。

ブスツとした顔をしている彼に、でも、と反論する。

「私たちが旅行に行くのを知っているのに、何もお土産を買っていかなかったら、大狼さん、がっかりするんじゃない？」

「いいんだ、あいつはこんなことでへこむじゃない」

「……きつとしばらく、会うたびに逸人さんに拗ねてみせると思うけど」

私の言葉に、逸人さんは親指で顎を触りながらしばらく悩んだ。そして溜息を一つつく。

「仕方ないな……ただし！ あいつには俺が買うから、美奈は何もしなくていい」

「ふふっ、は〜い」

そうして大狼さん用におもちゃの日本刀か侍変身セットを買おうとする逸人さんを止めながら、私は何軒かお土産屋を見て回り、仕事場で配るお菓子を吟味した。手に持った二つのお菓子のうち、どちらを買うか悩む私を、逸人さんが不思議そうに見ている。

「そんなに悩むなら二つとも買えばいいんじゃないか？」

「でもさっきお饅頭を買ったから。三つって多くない？」

「別にいいじゃないか。たくさんもらったほうが嬉しいだろう？」

「違うよ。逸人さん、女性へのお土産はね、多すぎても少なすぎても駄目なの」

「多くても駄目なのか？」

「うん」

私はたまにしか旅行や遠出をしないから、仕事場にお土産を持つていくことは少ないけど、うちの課の女性たちは旅行好きな人が多い。だから長期休暇明けはいつも、一週間分くらいのおやつをゲットできる。それは嬉しいんだけど……

だいたいみんな、それらがありがとうと言って受け取る。だけど、そのあとに……なんとというか嫌味のようなものを付け加える人たちがいるのだ。

「〇〇さんって毎月のようにどこかに行けて羨ましいわ〜」

「これでもかって買ってくるお土産って自慢よね〜」

「独身っていいわよね〜。好きなだけ自分でお金が使えるんだもの。そりゃあお土産もたくさん買えるわよね」

「ねえ××さんのお土産もらった〜？ 小さいチョコ一つよ。せこすぎじゃない？」

「などなど……」

聞きたくないのに聞こえてくるそれらの会話は、本当に恐ろしいものだ。

特に私は今、逸人さんと付き合っていることが会社中に広まって、課内でも微妙な立場だから、できるだけ口撃をされないようにしたい。

そんな気持ちで必死にお土産を吟味する私を、逸人さんは「女っていうのは、ホントめんどくさいな」と同情心を隠さない顔で見つめていた。

ひととおりお土産選びが終わり、二人で温泉街を歩いていると、和雑貨のお店を見つけた。

「あっ、和雑貨屋さんだ。逸人さん、ちょっと見てもいい？」

「もちろん」

店内には扇子やお財布、ポーチャやお箸など、色々な種類の雑貨があった。ポーチャやお財布なんかは店員さんの手作りで、一点物らしい。

（そうだ。母の日のプレゼント、ここで買っていいのかな？）

いいことを思いついたと思った私は、母が好きそうな物を物色し始めた。そうして気になったの

はウサギの柄の入った小銭入れと、晴雨兼用の折りたたみ傘。

(どっちも高いものじゃないし、二つとも買っていいのかな)

そこでふと、そういえば逸人さんはどこに行っただろう？ と気になり、店内を見渡した。

あまり広くない店の奥のスペースに彼の後ろ姿を見つけた私は、逸人さんの隣に行つて声をかけた。

「逸人さん、私レジに行つてくるね」

「……………」

「逸人さん？」

反応がないことを不思議に思いながら、逸人さんが手にとつて熱心に見つめている物を覗き見る。

それは白地に、大きな赤い椿の花が一輪刺繍ししゅうされているポーチだった。

逸人さんは眉間にしわを寄せつつ、そのポーチを見つめている。

(どうしたんだろう?)

私は逸人さんの腕を軽く触つて、もう一度声をかけた。

「逸人さん？ そのポーチがどうかしたの？」

「ん？ ああ、美奈。いや、なんでもない…………」

「そう？」

まるで今初めて私が隣にいることに気付いたかのように視線を向けた逸人さんは、すぐにまた手元のポーチを見つめる。何かすごく悩んでいるなあと思いつつながらその姿を見ると、逸人さんが小さな声で聞いてきた。

「……………なあ美奈、これ、どう思う？」

「どうつて…………綺麗なポーチだと思うよ？」

「もし美奈がこれをもらったら嬉しいか？」

「う、うん」

私の返事に「そうか」と呟くと、やっと彼の眉間のしわがなくなった。

「……………」

「それ、買うの？」

逸人さんが自分用に買うとは思えないそれを見つづくと、逸人さんは何故か気恥ずかしそうに頷いた。

「……………伯母に、やろうかと思うんだ」

「そうなんだ。うん、ポーチっていくつあつても困らないし、喜んでくれると思うよ」

「そうか」

私の言葉に嬉しそうに笑うと、逸人さんはそれをレジへ持っていった。

なんだか逸人さんらしくないその姿に、私は一人、首を傾げてしまったのだった。

結局和雑貨のお店では、母の日のプレゼントの他に、お箸と湯飲みも買った。逸人さんの家で使おうと思つて…………。ペアのそれらを買うのは、気恥ずかしかったけれど嬉しかった。

通りには他にも射的しゃてきや野球盤で遊べるお店があつた。私たちは初めてチャレンジした射的しゃてきで、キャ

ラメルを一箱ずつゲットする。

そうしてひととおり温泉街を見て回ったあとホテルに戻ると、食事を頼んだ時間までまだ三時間ほど余裕があった。

それなら、せっかく温泉に来たのだ。私はご飯の前に一回温泉に入りに行こうと逸人さんを誘ってみることにした。

「いいよ。でも、この部屋のじゃなくて大浴場に行くのか？」

「うん。せっかく来たから他のお風呂も入ってみたいの。露天風呂は、また夜に楽しもうよ」

「……まあいいか」

少しだけ残念そうな逸人さんを見ないふりをして、二人で大浴場へ向かう。せっかく来たんだから入れるお風呂は全部入りたいという気持ちは本当だけど、部屋のお風呂を後回しにしたのは、まだ外が明るくて、一緒に入るのはちょっと恥ずかしいっていうのが本音だ。

逸人さんはもう何度も見られているのに恥ずかしいのか？ とよく聞くけど、何度見られたって恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。しょうがない。

……でも今回、私は少しだけ期待していることがある。

実は私、昨日の夜に体重計に乗った時に、四捨五入して三キロ痩せていたのだ!! 基本的に毎日乗っている体重計だけど、逸人さんの家には置いていないし、先週は色々バタバタしててそれどころじゃなかったから、体重を測ったのは一週間ぶりだった。

通勤で歩く距離を増やした直後にちよーつとだけ変動があった体重は、そのあとは全然変わらな

くて落ち込んでいたんだけど、昨日測った時には四捨五入で三キロ減!!

つまり十の位くらいが変わったのです! この感動はダイエツトをしたことがある人になら、きっとわかってもらえると思う。もしこのまま順調に減っていけば、夢の四十キロ台に……!

そう思って自分の体を見てみると、なんとなく胸が少し縮んで、腰まわりのお肉も減ったような気がしなくもない。

(逸人さんは気付くかな? 気付いたら喜んでくれるかな?)

私はそんなうきうき気分で大浴場を思う存分楽しんだ。お風呂上がりにもまた乗った体重計の結果に思わずニマニマしながら、部屋へ戻ろうと廊下に出る。

鍵を持って部屋を出たのは逸人さんだ。大浴場の入り口で別れる時に、「俺はサツと済ませて先に部屋に戻っているから、美奈はゆっくり楽しんでおいで」と言っていたから、きっともう戻っているだろう。

とはいえ別れてまだ一時間くらいだし、一応携帯で確認をとることにした。

『美奈、どうした?』

「逸人さん、私今お風呂出たんだけど、逸人さんは?」

『俺はもう部屋に戻ってきているよ。鍵は開けておくから』

「うん」

『部屋はわかる? 迎えに行こうか?』

「やだなあ、大丈夫だよ」

まるで小さな子供にするような提案に、笑いながら心配しないでと伝えた。

『そう？　じゃあ待つてるよ』

「うん、すぐ行くから」

電話を切ると、ホカホカに温まった体で私は部屋へと向かったのだった。

「……………美奈」

「ごめんなさい……………」

「どうしたらこんな真逆の場所に来られるんだ……………」

ホカホカだった体がすっかり冷め切ってから再会した逸人さんは、私を見て不思議そうに首を傾げた。

でもね逸人さん、私だって不思議だよ。

ちゃんとホテルの案内表記を見ながら歩いたのに。途中でホテルの人にも聞いたのに。それなのに逸人さんが待っている部屋に辿り着くことができないというミステリー。

どうやっても部屋に戻れなくて私が半泣きになっていた時に、さすがに遅すぎると思った逸人さんが電話をしてきて、結局、迎えに来てくれたのだ。

「美奈って、もしかして方向音痴なのか？」

「……………違うよ。ちよっと人より道を覚えられなくて、地図がよくわからないだけなもの」

「いや、それを方向音痴っていうんだろ。まあ、これで美奈を一人で歩かせちゃいけないってわかっ

たからな。もうこんな目にはあわさないよ」

「うう……………ごめんなさい」

人の迷惑にならないように頑張って道を覚えようとしてるのに、どうしていつもこうなってしまったのか……………逸人さん、ほんとにごめんね。

そうして小さい子供のように手を引かれて部屋に戻ると、何故かそのまま奥の露天風呂のほうへと連れていかれた。

「は、逸人さん!？」

「だって美奈、すっかり湯冷めしちゃっているだろ？　大丈夫。まだ夕食まで時間があるから、少し温まればいいよ」

そんなことを素敵な笑顔で言うと、逸人さんは繋いでいた手を離し、スルツと私の浴衣ゆかたの帯を解いてしまった。

「そんなに冷えてないよっ」

「やっぱり美奈にはこういうピンクが似合うな。浴衣すごく似合ってる。可愛いよ」

「え、あ、ありがとう」

「うん。だからまたあとで着てくれ」

「ちよっ、逸人さんっ」

逸人さんは、手早く私の浴衣を床に落とし、下着にまで手をかけてくる。

「わかったからっ、自分で脱がせてっ」

必死に逸人さんの手を避けた私は、慌てて露天風呂へと逃げ出した。

柵にあったカゴに脱いだ下着を入れ、扉を開けて外に出た。すると目の前に露天風呂が見える。部屋についているといっても、大人が四人は入れそうなほど大きな湯船だ。

「わあ……素敵……」

私はさっそくかけ湯をすると、ゆっくりと乳白色のお湯に体を沈めた。

さつき入ってきた大浴場とは、お湯の種類が違うみたいだ。こっちのお湯は少しとろみがあって、お肌にとっても良さそう。

嬉しくなってお湯から腕を出し触っていると、予想どおり私を追ってきた人の声がある。

「美奈、お湯はどう？ 気に入った？」

「うん。なんだかすべすべになった気がする」

「ふーん」

さっきの私と同様に体にお湯をかけたあと、逸人さんもお風呂に入ってきた。そして私を後ろから抱きこむようにして座る。

こうしてみると、このお湯が乳白色なのはとってもありがたいな。全部見えていたら、緊張してお風呂を楽しむどころじゃなさそうだ。

それでもドキドキしてしまつて視線を下げると、逸人さんが私の腕を触ってきた。

「ほんとだ。すべすべだな」

「ね、嬉しい」

「腕だけじゃなくて、ここもすべすべになってるな」

そう言つて、逸人さんが私のお腹に手を這わせた。

「お湯の中じゃわからないでしょう」

「美奈の肌だぞ？ お湯の中だろうと簡単にわかるさ。……ん？ んん？ もしかして美奈、少し痩せたか？」

（気付いてくれたー!!）

お腹、そして胸へと手を這わせたあと、そう聞いてきた逸人さんに、私のテンションが一気に上がる。確かに四捨五入して三キロ痩せたけど、見た目はほとんど変わっていないのに、気付いてくれた！

「そうなの！ほんとにちょっとなだけだね」

嬉しくなつて顔を後ろへ向けると、逸人さんは眉間にしわを寄せていた。

「美奈、ダイエットはしない約束だろ」

「無茶なこととはしていないよ。ご飯だつて毎日三食しっかり食べてるもの。ただ、ちょっとだけお米を減らしたり、通勤時に歩く距離を増やしただけなの。約束どおりご飯を抜いたりはしないから、心配しないで」

「……別に美奈は太つてないつて言っているのに……」

逸人さんが私のおでこに頬を付けてそう呟いた。聞こえないフリで返事をしないと、ふうと溜息をつかれる。

（逸人さん、心配してくれるのはありがたいけど、私は痩せたいの。だから、無茶をしない限りは見逃してほしい）

そう思っ黙っていると、私のお腹にまわされていた逸人さんの手が、ゆっくりと胸を揉み始めた。両手で胸を持ち上げるようにされ、お湯の中から頂が現れる。

「は、逸人さんっ」

私の胸を持ち上げたまま、逸人さんの指が両方の胸の先を掴む。そのままくりくりとされると、だんだんと先端が尖っていくのが見えた。

明るい場所で自分の胸の変化を見せられて、恥ずかしさで顔に熱が集まる。

逸人さんの手を引き剥がそうと自分の手を重ねるけど、逸人さんは気にもせず尖り始めた先端を軽く爪で引っかいた。

その刺激で、私の足の間がきゅつと動く。

「逸人さん、お願い、止めて」

「大丈夫、触るだけだから」

「触るだけでも、ダメッ」

せつかくの温泉を、自分のせいで汚したくない。その一心で逸人さんの手を引き剥がし、背中を離して彼に顔を向ける。

逸人さんは困ったように眉を下げながら、「触るのも駄目なのか？」と聞いてきた。私はその言葉に頷くと、わかったよと溜息をつく。

逸人さんが手をまたお腹へと戻す。だけど、それ以上いたずらをする気配はなかった。ほっとして、私もまた前を向いたんだけど……すぐに後ろから小さな声があった。

「露天風呂の醍醐味が……」

（逸人さん、お風呂は心も体もほっこりできるのが醍醐味です！）

結局そのまま十分ほど二人でお湯に浸かっていたけど、たまに聞こえてくる溜息を、私は全てスルーしたのであった。

+

部屋に運んでもらった夕食は、もう豪華！の一言。

船に盛られたお刺身に、県のブランド牛の石焼き。カラフルな前菜にのどぐろの煮付け。煮物や炊き込みご飯。他にも食べきれないほどの食事に、二人で顔を見合わせて笑う。

「すごいね」

「ああ、旨そうだな」

「アルコールなどお飲み物のご注文は、内線五番で承ります。それではごゆっくりとお楽しみくださいませ」

「はい、ありがとうございます」

お姉さんが笑顔で部屋を出ていったあと、逸人さんと食前酒のグラスをかつんとあわせて乾杯をした。

自家製の巨峰酒だと説明された食前酒は、お酒が苦手な私でも呑みやすくて、とっても美味しかった。「この巨峰酒すごく呑みやすいね。これなら私でも呑める」

「そうか。他にも桃やさくらんぼの酒があるみたいだから、少しずつ味見してみればいいよ」「うん」

お腹がはち切れそうなほどの食事をのんびりと楽しみつつ、逸人さんが頼んでくれた果実酒を少しずつ味見する。私が残しても、逸人さんが代わりに呑んでくれるから、ついつい呑みすぎてしまう。デザートが運ばれた時には、私の瞼は上下がくっついてしまいそうになっていた。

「美奈……眠いのか？」

「ごめ……お酒を呑みすぎたのかも……」

「まあ遠出して疲れていたところに、苦手なアルコールが入ればそうなるか。少し寝る？」

「うん……」

まだお酒を楽しんでいる逸人さんには悪いけど、自分ではどうしようもない眠気に負けてしまう。謝ると、逸人さんは仕方ないなど笑って許してくれた。

「じゃあ寝かせてあげるけど、その代わり明日は早起きしてくれよ」

「うん……うん？ あれ？ チェックアウトって……」

「チェックアウトは十一時だけど、夜の分も朝、頑張ってもらおうから」

「……うん？ わかった。じゃあ私、先に寝るね」

「ああ。おやすみ」

「おやすみ……」

もうほとんど開いていない目でなんとかベッドに辿り着いた私は、逸人さんの言葉に甘えてぐっすりと眠りについたのだった。

(なんだろう……お腹の奥がうずうずする……)

まだ瞼は開いてくれないけど、私は自分の体に変化を感じて、少しずつ意識を浮上させていった。空調がしっかりと効いた室内にいるはずなのに、何故か体のいたるところがスースーする。

そして、お尻には身に覚えのある感覚と、身に覚えのない感覚……

少しずつ自分の状態を理解していった私は、これは早く目を覚まさないといけないと気付いた。

(起きろっ、起きるんだ美奈！ 今起きないと、きつと後悔するぞっ！)

そんな気持ちで必死に眠気と戦っていると、犯人が私に声をかけてきた。

「あれ？ 美奈、起きたのか」

「う……ん、お、きたあ」

「ふふ……起きているのに目が開かないのか？ ならもう少し寝ていてもいいよ」

そう言った犯人——逸人さんが、私の瞼の上にキスを落とす。とても優しいそれは、私をまた眠

りの世界へと誘導するけど、ここで誘惑に負けるわけにはいかないのだ。

「やあ……起きる。起きるから……触らないで……」

「美奈……寝ぼけているにしても酷いことを言わないでくれ」

「だっ、て……」

手で逸人さんを払うようにしながらそう言うと、さっきから感じていた異物感がさらに増した。それから逃げるように、私は体を横に捻る。

すると、逸人さんはそれを利用して私をうつ伏せにしてしまう。そして、私のお腹の下へ枕を押し込んだ。

「おお、舐めやすくなった」

「やめ、てっ」

その言葉は、私のお尻のあたりで言われた。私のそこへ逸人さんの吐息が当たる。見なくても何をされようとしているのかわかってしまい、私はそれから逃げるためにお尻を動かした。すると、逸人さんが私の中に入れていた指を小刻みに動かしてくる。

「やあっ」

その刺激でついに目が開く。私は両肘をベッドにつけ、後ろを振り返った。次の瞬間、真っ先に思ったのは、振り返らなければ良かった……だった。

ベッドに入った時は間違いないはずの浴衣や下着が消えて、裸で、逸人さんに向かってお尻を突き出している私。そんな私を、きちんと浴衣を着ている逸人さんが見つめていた。

そして、その逸人さんの指が今、私の中に二本入っている。

「逸人さん……そこは駄目って言っているのに……!!」

「でも、痛くないだろう?」

「痛いとか、痛くないとかの問題じゃないの!」

「……気持ちよくない?」

「よくない!!」

そう……逸人さんの両方の人差し指が、別々の入り口から私の体内に収まっていたのだ! 膣内に入っているほうは、指の付け根まで深々と。言いたくないほうに収められているのは、逸人さん曰く、まだ第一関節くらいまでしか入れていないらしい。

(まだってなんだ、まだって!!)

私を手を使い、なんとか逸人さんの手をお尻から退けると、彼は残念そうに息を吐いた。

「美奈が嫌がるから、今日はそこを舐めていないぞ?」

「舐めなければいいってもんじゃないの!」

「……ごめん」

私が怒ると、逸人さんは大人しく謝り、眉を下げてシュンとした顔を見せた。

その顔に、少し怒りが収まり、私の体の強ばりがほどける。すると彼は私のお尻を抱えるようにして抱きこみ、尻タブを甘噛みし始めた。

「ひゃあっ」

「んん、やっぱり温泉はいいな。美奈のお尻プリプリだ」
（い〜や〜！）

逸人さんは強弱をつけながらお尻にキスを繰り返し、合間に軽く歯を当てるようにして噛む。くすぐったいその刺激で私のお尻が揺れると、笑っているのか彼の吐息が大事な部分にかかった。

「いいよ、美奈、絶景だ。もっと動いて」

「逸人さんっ、するのはいいの。だから、ちゃんといつものように」

「でもせっかく旅行に来たんだから、いつもとは違うこともしよう」

「ち、違うこと……!?! お尻は嫌だよ」

「そこはもう諦めたよ……今日は」

（最後！ 小声で言った最後の言葉がとても怖いよっ）

オレンジ色の照明の下でも、私の顔が青ざめたことに気付いたのか、逸人さんがお尻から顔を上げた。そして宥めるようにお尻をさわさわと撫でる。

「大丈夫。この旅行は美奈への誕生日プレゼントだ。俺は美奈を気持ちよくさせたいだけだから、素直に俺を感じてくれ」

「変なことしない？」

「しない」

「絶対？」

「ああ」

「……わかった」

逸人さんを信じることにした私は、力を抜き、枕に顔を押し付けるようにした。

すると逸人さんは、また私のお尻へと顔を近づけていく。今度は舌で何度か舐めたあと、両手でお尻を割り開いた。

私が寝ていた間にも逸人さんに愛されていたのか、私の膣内はすでに潤^{うる}っていて、彼に開かれたことでくちゅりと音を立てた。

そこへ逸人さんが指を二本、ゆっくりと沈めていく。

「んっ……ふ……」

揃えた指を規則的に出し入れしたあと、逸人さんは膣内に収まった二本の指を広げるようになるが、私に聞いてきた。

「さっきもほぐしたから柔らかいけど……美奈、痛いかな？」

「ううん、大丈夫」

逸人さんの指が動くたびに水音を立てるそこは、指の動きが早くなっても、私に痛みを感じさせることはなかった。

私の返事を聞いた彼は、そっと私の中から指を引き抜く。そして浴衣^{ゆかた}を脱いで私と同じように裸になると、すでにいつでも突入OKな状態になっていた彼自身に、ベッドに転がしていたゴムを被せ、後ろから私に覆い被さってきた。

自覚してなかったけど、少し体が冷えていたみたいだ。彼の体温に包まれてホッとする。

逸人さんは私を後ろから抱きしめて首筋にキスを落とした。

「ごめん、布団をかけてあげればよかったな。寒かっただろ？」

「だ、大丈夫」

いえいえ、上半身に布団をかけて、お尻だけ丸出しのほうが恥ずかしくて耐えられないから。

一瞬自分のそんな姿を想像して頭をぶんぶん振る。

すると、私を抱きこんでいた逸人さんの右腕が、太腿のほうへと下りていき、両足を開かせるように私の足をずらした。

私の入り口に、逸人さんのものの先端が当てられる。

そのまま何度か、私の割れ目にそってそれを上下にこすり付けると、狙いを定めて押し入ってきた。
(えっ!? この体勢で入れるの!?)

驚いたせいか私の体に力が入り、少しだけ入っていた逸人さんが外へと押し出された。

「美奈……大丈夫だから力を抜いて」

逸人さんがそう言い、私の耳を口に含んで舐める。彼の肉厚な舌で、ゆっくりと耳の形を辿るように舐められると、体が小刻みに震えた。

「あっ……んんっ」

顔の横でぎゅっと握り締めていた私の手を、逸人さんの手が上から包み込む。

「大丈夫、痛くない。怖くないから……美奈、俺を美奈の中に入れてさせて」

「……………ふ……………」

口を開いたら変な声が出そうだったから、頷くことで逸人さんに返事をし、私は体から力を抜こうと努力する。ドキドキと心臓がうるさいなか、もう一度逸人さんが私の中へと入ってきた。

これまで何度か逸人さんと体を重ねたけど、この体勢するのは初めてだ。今までとは違う角度で入ってくるそれは間違いなく逸人さんのものなのに、なんだか違うもののような気さえしてくる。

「くっ、きつ……………」

短く呼吸をした逸人さんが、私の足を広げるために添えていた右手を、秘芯へと伸ばしてきた。そして辿り着いたそこを、優しく摘んで捏ねるように刺激してくる。

その刺激で体が揺れる。子宮の奥からは、逸人さんを助けるように潤滑液が溢れ出た。すべりのよくなった私の膣道を、小刻みに出し入れをしながら奥へ奥へと逸人さんが突き進んでいく。

「んっ、んっ、……………んんっ」

「ふう……………」

ようやく私のお尻に逸人さんの繁みが触れると、逸人さんがゆっくりと息を吐いた。つられるように私も息を吐く。すると直後、ぐいっとさらに奥まで押し込まれた。

「うあっ」

「……………」

いつも以上に自分の中が広げられている感覚に、息が止まりそうだ。

逸人さんは短い呼吸を繰り返す私を宥めるように、肩やお腹を何度も優しく撫でてくれた。

「美奈、動くよ」

「う、うん」

逸人さんが体を起こして両手で私の腰を掴み、自分のものを引き抜いていく。そして一番太いところが抜けそうになると、勢いよく私のお尻に向かって腰を叩きつけた。

肉を叩く音が室内に響くと同時に、体に走った衝撃で私の背が反り、上半身が浮く。

「うあつ、あつ、……んっ」

逸人さんはそれを二度三度と繰り返した。ゆっくり引かれる時の感覚も、強く叩きつけられ奥をえぐられる角度もいつもと全然違う。

慣れないそれは、私に恐怖と快感を同時にもたらした。

浅く息を吐くことでなんとか逸人さんの動きについていこうとする。

次第に彼の動きは激しさを増していく。

「ふっ、あつ、あ、ひうっ」

激しい揺さぶりで私の体がどんどん上へと動いていくと、それを見た逸人さんは動きを弱め、私を引き戻すように覆い被さってきた。

そして腰を支えていた両手を胸へと移動させる。今日はあまり触られていなかったのに、私の胸はシートに擦れる刺激で、見なくてもわかるほどに先を尖らせていた。

逸人さんはその頂を両手の親指と人差し指で掴み、手のひらで胸全体を掬い上げる。

最奥で小刻みに揺さぶりをかけながら、胸を痛いくらいに掴まれた。

「あ、あ、あ、やあ」

もう違和感も痛みも何もない。ただ逸人さんから与えられる刺激に酔っていると、私の秘所からは次々と愛液が滴り落ち、太腿へと道を作った。太腿に流れるそれが恥ずかしくて、逸人さんに気付かれないようにと祈る。

だが、室内に響く濡れた音で気付いたのだろう、そんな私の願いもむなしく、逸人さんは体を起こすと私の太腿へと手を這わせた。

「すごいよ美奈……バックが気に入ったんだな」

「ち、違っあああっ」

逸人さんの嬉しそうな声が聞こえたと思ったら、彼は私のお尻を両手で割り開き、また勢いよく腰を叩きつけ始めた。

最初よりもさらに奥を突き、そのまま私のお尻を両手で揉みしだく。

声が堪えられなくなってしまう。顔を枕に押し付けて激しい時間を耐えていると、あるときつく閉じた目の奥で光が弾けた。

「やああああっ」

次の瞬間、これでもかかと足を開かされて逸人さんを押し込まれる。耐えられなくなった私は、背を反らして白い世界へ飛んだ。

「はっ、はっ、は、……ふ……」

体中の力が抜けてベッドに突っ伏す。逸人さんは、そんな私の腰を持ち上げるようにして支えた。「いっちゃった？ 俺ももうすぐだから、ちょっと我慢してくれ」

「ま、待って……」

「大丈夫大丈夫。すぐだから」

私のお願いを笑ってスルーする逸人さん。私はなんとか逃げようと、上手く力が入らない手でヘッドボードを掴む。なのに、逸人さんは勢いよく律動を再開させた。

「ま、待って、いやっ、……あああつ、ひ、はっ、……ああつ」

「美奈、聞こえる？ 美奈が嬉し涙を流している音がするだろう？ 何度聞いても堪らないけど、今日はいつもよりもさらにいい音だな」

「……やあつ、や、ひいっ」

秘所が立てる音を、逸人さんがとても嬉しそうに指摘してくる。ただでさえ敏感になっている場所を容赦なく攻められているのに、自分ではどうしようもないことまで言われて、私は羞恥に駆られ肩越しに逸人さんに頼んだ。

「は、逸人、さんっ。もう……やだあ」

「……………」

肩越しに目が合った逸人さんは、急に真顔になるとピタッと腰の動きを止めた。

（あ……よかった）

どうやらお願いを聞いて止めてくれるみたいだ。ホッとした次の瞬間、逸人さんが私の二の腕を掴んで上半身をあげさせる。そしてまるで食べるように大きな口で私の舌を呑み込んだ。

舌を擦らせ合い喉の奥まで愛撫するようなキスに、苦しさから目に涙が浮かぶ。逸人さんはもが

く私を両手で絡め取ると、腰の動きを再開させた。

「美奈っ……可愛い、可愛いよっ……！」

「……っぐ、……っんんー」

「っはあ、……美奈、美奈っ」

熱に浮かされたような逸人さんの声。

背中に走る刺激に、またしても体を跳ねさせて達してしまう。

そんな私をきつく抱きしめ、逸人さんもうやく終わりを迎えたのだった。

次に目が覚めると、私は逸人さんと一緒にお風呂に入っていた。

「逸人さん……今、何時？」

「おはよう、美奈。まだ六時前だよ。朝食は七時からだから、のんびり風呂に入っても大丈夫さ」

「……」

上機嫌でそう言いながら、飽きもせずに私の胸や腰を撫でる手。

身の危険を察知した私は、それ以上お風呂を堪能せずに上がることを決めた。

+

二人で初めて行った温泉旅行は、濃厚すぎるエッチを除けばとっても楽しいものだった。

これからもこうして、二人で色んな場所に行つて、一緒に色んな景色を見よう。そう逸人さんと約束をした。

逸人さんは、次こそ露天風呂の醍醐味を味わうと言つていたけど、私は次もスルーする予定だ。旅行から帰つた日は母が用意してくれたご飯を逸人さんも一緒に食べて、我が家に泊まつてもらつただけけど……その夜、我が家には私の悲鳴が響くことになる。

せつかく減つていた四捨五入して三キロ。大事な夢への第一歩だつた三キロ。

なのに、美味しいご飯をお腹いっぱい食べて帰つてきた私の体重は、すっかり元に戻つていたのだつた……うわくんっ。

私の悲鳴に驚いたみんなが駆けつけてきたけど、私から話を聞いた三人の反応は三者三様。

母からはそんなことくらいでと怒られ、父にはそういうこともあるよと慰められ、逸人さんにはとても素敵な笑顔で気にするなど言われた。ううっ。

それからしばらくしたある日。逸人さんが我が家で私のお兄ちゃんたちと対面し、三人の意外な繋がりを知ることになるんだけど……

それはまた、別のお話。

変態は恋人の寝込みを襲う おまけ

ゴールデンウィーク最終日。

紙袋を手にした逸人は、案内された部屋のドアを開き、中へと入つた。

「いらつしゃい、逸人。今日はどうしたの？」

春の暖かい日差しが差し込む室内。彼を出迎えるためにソファから立ち上がった女性に、逸人は彼女が内心驚くほど柔らかな笑みを返した。

「伯母さんに渡したいものがあつたから。今日は伯父さんとジジイはいないの？」

「あの人、今日は取引先とゴルフらしいの。残念ね、逸人が来ると知っていたら急病になつていてでしょうに。お父さんは……たぶんあの子に会いに行つてるわ」

今日はとても天気がいいから——そう言つて窓の外を見つめる伯母の表情で、逸人は祖父の行き先が自分の母親のところだと察した。

「逸人もたまには顔を見せてあげに行つてるの？」

「日本に居る間は、月に一度は行つてるよ」

「そう、ならよかつた」

そうおつとりと笑う伯母の顔を、逸人はジッと見つめる。そして、特に体調は悪くなさそうだと

内心ホツとしながらソファに腰かけた。

逸人から紙袋を差し出され、素直にそれを受け取った彼女は、袋の中を見て首を傾げた。

「それ、お土産みやげ。土日に旅行に行ったから」

「まあっ……ありがとう、逸人」

逸人の言葉に、伯母は目を丸くして彼を見つめたあと、嬉しそうに微笑んだ。

その顔を正面から見るのが少し恥ずかしくなり、逸人が視線を逸らすと、伯母は「開けてもいいかしら?」と言いつつ袋の中身を取り出す。

「大きい箱は饅頭まんじゅうで、それは酒、伯父さんの好きな辛口だから。あと隣県の銘菓の餅。ジジイのどに詰まらせるなよと言っついて」

「ふふっ、いっぱいあるのね。これは?」

視線を逸らしたまま説明する逸人に、彼女は包装紙に包まれた物を手に取り尋ねた。

「それは、伯母さんに」

「私に? ……ああ、綺麗な椿ししゅうの刺繍しゅうね。これはポーチかしら。ありがとう逸人。大事にするわ」
本当に嬉しそうに頬を染めた女性の顔を横目で確認すると、逸人の耳が赤く染まった。思えば家族への贈り物など、母が死んで以降一度もしてこなかった。

逸人は伯母の表情を見て、こんなに喜んでくれるなら、もつとマメに贈ればよかったと後悔する。
「旅行は彼女が行ったの?」

「ああ」

「ふふっ、この間彩ちゃんから教えてもらったのよ。逸人に彼女ができたって。ビックリして心臓が止まるかと思っちゃった」

「縁起でもないこと言わないでくれよ」

「それくらい驚いたって話よ。どんな子なの?」

彩華あやかから聞いたんだろうと言って話そうとしない逸人に、伯母は逸人から聞きたいんだともう一度尋ねた。逸人は伯母から目を逸らしたまま、ポツリと呟く。

「……俺にはもつたいないほど、可愛い子」

「そう」

「可愛くて、優しくて、小さくて、柔らかい。とても温かい子」

「ふふふっ、そうなの」

「この前、彼女のご両親に挨拶に行ったんだ」

「じゃあけっこ」

「結婚はまだ」

逸人の言葉に目を輝かせた伯母に、逸人は速攻で否定をした。

目に見えて落胆する伯母に苦笑を漏らす。

「俺が、父親から認知されていないってことと、結婚を前提にお付き合いをさせてほしいって話をしてきた」

「……………」

「その時に彼女のご両親がさ、俺と彼女にどんな違いがあるんだ？ って言ったんだ。片親でも全力で愛してくれる母親と、母と同じように愛してくれる人たちがいた俺。そうやって愛されて育ててきた俺の、何が彼女と違うんだって」

嬉しかったと小さく呟いた逸人の声を、伯母はしっかりと聞いた。

自然と彼女も微笑みを浮かべ、目を逸らしたままの甥を見つめる。

「素敵な方たちなのね」

「ああ、さすが彼女のご両親だよ」

微笑んだかと思うと、逸人はいきなり「今日はこれで帰るから」と言う。そして次の瞬間にはソファから立ち上がってドアへと向かい、ドアノブに手をかけた。

慌てて立ち上がってあとを追おうとした伯母に背を向けたまま、逸人が早口で伝える。

「その時に改めて思ったんだ。俺は今までみんなに助けってもらってたんだって。だから、その、ありがとうっ」

「逸人っ」

伯母の呼び止める声を無視して部屋を出た逸人は、足早に玄関へと向かい、見送りに出てきた家政婦に挨拶をして帰った。

（ああ、くそっ。こんなの俺のキャラじゃないのに）

自分の顔に熱が集まっているのを自覚した逸人は、祖父らがいなかったことに心の底から安堵したのだった。

第二話 変態は動く

長い休みって嬉しいけど、休み明けの初日はいつもより体が重い気がする。

私、森下美奈がそんなことを思いながらも出勤し、給湯室の掃除やらテーブル拭きやらを終わらせると、突然、井上課長から呼ばれた。なんだろう？ と思いながら課長のデスクに足早に向かう。

「森下、今日から新人が配属されるのは知ってるな。明日から朝の雑事はそいつらにやらせるから」
「あつ、はい。わかりました」

朝の雑事とは、さっき私がやっていた仕事のこと。

毎朝、少し早めに来て、給湯室を片付けたり、先に出勤してきている人にお茶を出したり、会議室と応接室のテーブルを拭いたりする作業だ。本当なら、入社一年目の人が担当することになっている。

「新人の指導は土屋が担当するが、この一年あれをやっていたのは、ほぼお前だからな。新人が困っていたら声をかけてやってくれ。ただし！ 簡単に手を出すなよ」

「は、い」

去年の新人の堀川さんの時のように代わってやったりするなど念を押されてしまう。私が頷くと、課長は話を終わらせた。